

新刊紹介

古事記序文講義

山田 孝雄 氏述

志波彦神社が鹽竈神社に奉遷せられるに當つて、それを機縁として、その奉賛會によつて、同社務所中に古事記研究會が設けられ、山田博士毎月一回これが指導にあたり、その昭和九年八月以降十年四月に至る古事記序文の講義を筆録したものが本書である由、序文に記して居る。

全篇の體裁は、山田博士の序、宮司古川左京氏の序（一一二頁）に次いで現存最古の古寫完本たる眞福寺本古事記の寫眞三葉、次に古事記序文の全文をその文體構造に隨つて揭示し（一一一頁）次に「古事記の本質」について論ぜられ（十三—三六頁）、さて「序文の解釋」をしてゐられる（三七—二〇三頁）。

「古事記の本質」については已に、昭和九年四月「文學」誌上に於いてもその見解を述べられてゐる。即ち從來古事記を（一）歴史と見るもの、（二）文藝上の作品と見るもの、（三）神話となす説等あれど、これ等を一概に評せば其の研究が古事記の本質に觸れてゐないと言ふべきである。是を上代史研究の材料とし、

上代歌謠、或は叙事詩研究の對象とし、又は神話研究の資料とはなし得べきも、それを以つてその本質を示すものとは言ひ難い。單に材料とする點より言はば我國古代法制研究の資料とするを以つて最も其の本質に觸れたものと云ひ得ようが古事記の本質は斯かる所には存しない。その本質の何たるかはその上表文である所の所謂序文に明確に表示されてゐる。即、その中に「邦家之經緯、王化之鴻基焉」と言ふ語があるが、これこそ古事記の本質を示すものである。「國體の如何及び天皇政治の根本」を示したものが古事記であり、「吾が民族の經常（即ち古今不易）の精神を徴するに足る、權威を有する古代の文獻」中に於いても最も重要なものと云ふべきであつて、こゝに古代日本の姿を見ると同時にこれを正しく理解することによつて現今の我國家指導の理念をも見出し得べきものである。所謂「皇道の本源」がこの骨髄をなすが故にと博士は明らかにさう論斷してゐられる。

偕て、「序文の解釋」は初めに上表文たるこの序文の文章の構造について説明があり、次に文の一字一句について精しい解釋が施されてゐる。本居、平田の諸學者より現今の古事記學者の所説にいち／＼是非の檢討を加へ、以つてその論斷のよつて來るところを明確に示してゐる。（菊版、本文二〇三頁、其他序文二頁、寫眞三葉、國幣中社鹽竈神社、志波彦神社發行、非賣品）（兩宮）

室町時代短篇集

笹野 堅 氏 編著

從來文學史上に於いて、暗黒時代と稱せられた室町時代は、その研究に於いても亦一般に閑却せられてゐたかの觀を呈して居た。室町時代小説の研究に於いて比較的其の研究が進められなかつた理由は種々あるであらうが、其の大なる原因の一として研究對象たる資料不備の點を挙げて、もよいであらう。明治二十

四年、今泉定介氏によつて刊行された御伽草子二十三篇以下新編御伽草子、室町時代小説集、右朋堂文庫本御伽草子、近古小説新纂等比較的見易い活版本に收められたもののみにも數へ擧げれば本書を俟たずして已に九十篇に餘る。のみならず古板本、奈良繪本等としても室町時代の短篇小説は可なり多く傳へられてゐる。然し乍ら現在一般には此種古版本、殊に奈良繪本に至つては全く稀觀本として骨董品の取扱を受けて居る状態であり、活版本に至つては學問的資料として間々物足りぬ場合を生ずる。本書載する所の小説總じて十篇(一〇—一四二六頁)いづれも從來未刊のもののみとは雖も數に於いては必ずしも多いとは言はれぬ。其の底本とする所のもの寫本二種(しやうとくとく太子の本、京太郎物語)奈良繪本五種(てんしん、おようのあま、大橋中將、ゆみつき、武家はんしやう)、板本三種(あふぎなかし、ひめゆり、強盜鬼神)、凡例にもある如く、いづれも原本から忠

實に翻寫し、のみならず、それ等の挿繪もその儘すべて寫眞版として、こゝに亦挿入されてゐる。底本の誤脱をもその儘移して示されて居る點、又、原本の本文、挿繪の丁數を夫々記入せられてゐる點等、原本に接せずして全く原本に據る思がある。たゞ底本の寫體と挿繪の彩色を見得ない丈けである。其の上、每篇懇切なる解説を施してゐる。(八一—九九頁)かつて島津氏の近古小説新纂に於いても同様の感を抱いたことであるが、こゝにも數的に單に十篇とは云ひ乍ら、本書が持つべき學問的價値の一半はこゝに與へらるべきであらう。

本書は右の十篇の外に、巻初に(七頁—七六頁)著者の「御伽草子攷」が載せられてゐる。序言に於いて「こゝに御伽草子攷を附載したのは、それに關する(御伽草紙の名義や範圍等)わたくしの見解を明かにし、又この書の撰輯の態度を示すものである」と述べてゐる。前の十篇は稀觀の未刻本なる故、單に其の紹介を目的に羅列したものでないことを知る。論ずる所、御伽草子の(一)名義、(二)範圍、(三)特質、についてである。從來御伽草子なる名稱が誤用されてゐた理由、御伽草子を近古小説の汎稱とし、假名草紙や舞の本まで誤つて其の中に包含してゐた理由等を述べて「一般に御伽草子は室町時代の婦幼の興味をひくやうな、また其の讀物にふさはしい物語として當時の上流の青少年男女の讀本として作られた短篇小説であつたのであらう。これがわたくしの御伽の草子から歸納したところの御伽草子の特質についての結論である」と云ひ、隨つて必然的にそれ

が奈良繪本の體裁を備へるに到つたものと思はれ、此故に御伽草子が特に奈良繪本を標準として考察されねばならないと言つて、これを規準に假名草子や舞の本との混亂を避けねばならないと云ふのが其の所論の主旨である。なほ本論考の註に引用された舞曲、古淨瑠璃等の文は十篇の短篇集と共に研究資料として注意すべきであらう。

其他卷頭には文正草子の奈良繪本、丹綠本、御伽草子本、三者の着色木版を比較掲載して其の變遷を示し、卷末には語句、詩歌、俚諺等の索引が添へられてゐる。(四二七—四七二頁)(菊版四七二頁。木版口繪一葉 價六、八〇、東京栗田書店發行)

(雨宮)

Saurat, Denis = A History of Religions, 1934.

クレメンのマジジブな宗教史が出て以後自分の知る限りでは四本ほど宗教史が出版されてゐるが、本書とゴウエンのもののが先づ目につく。本書の特色は、宗教史は主として二つの人間の慾望、即ち神と不滅に對する二大慾望の發達の歴史である、とし、しかも不滅への慾望が大體に於いて前者を凌ぐものであるとの見地から諸宗教を考察してゐる點にある。内容は十二項、先づ野蠻人の宗教より説き出し埃及、メソポタミヤに及んでゐるがアニミズムに就いては論じてゐなく、animism と animatism

に關するカーステンの新研究を我々はこゝに加へて考へて見ればなるまい。進んで波斯、希臘、イスラエルの宗教に移り、基督教は三部に分ちて、新約の基督教、基督教と希臘羅馬の世界、基督教と歐洲文明、となつてゐる。いつもの事ながら此處でも基督の愛の動きに興味を感じる。神の愛が「愛の怒」となつて出て來る處は佛教に育つたものには異様に思はる。「恐怖の神」の如く振舞つた基督の姿を見よ。無花果の樹に實を求めて得ざりし時基督は「今より後いつまでも果を結ばざれ」と云ひ放てば、その樹は「立ちどころに枯れたり」と云ふ。辯護者は彼の靈力の業を示すものと云ひ、又猶太教の無用なることを譬喩的に語れるものとも云ふ。セミテック風に考ふる事を學ぶ必要もあるかもしれぬが、釋尊と異りて「征服的な力」を用ひ「一度怒りて天下定まる」的の怒を要した「悲しみの人」基督は、王子としての、そして又「微笑」し得た佛陀との面白き對照を示してゐる。オットーの名著「聖なるもの」も此の邊の氣風に據りて組立てられてゐると思ふ、それで彼の理論は優れてゐても佛教經驗には直ちに用ひられぬ難點がある。次には回教、印度教を取扱ひ佛教に來てゐる。近頃の宗教史が佛教の一項を加へればならぬ事になつたのは歐米人にとつては随分重荷であらうしい。こゝでも明白な誤解と幼稚な笑ふべき説明が内容となつてゐる。然かも「生の否定は佛教の本義、是は西洋人殊に近代人の最も嫌ふところ、……我々は東洋の宗教に何等の希望をもちかざるを得ず」と勇敢に斷じてゐる。文面によつて推察するに著者は羅馬

舊教の信奉者らしく、此教の將來の發達に生の救済を託してゐる。最後に近代に於ける宗教的動勢を述べて結論に入つてゐる。

本書を概観するに、總じて主論は簡素にすぎ、引用文を以つて埋めたる點も多く、説明も不足勝ちであり短評式な試みとなつてゐる。その意見も容易に之を認容し難い點がある。只筆致の流麗卒直明快な論風は、一氣に讀了せしむる魅力を有してゐる此は本書の強みとする所であらう。全卷三百十五頁。(Y)

Ward, C. H. S. =

Outline of Buddhism. 1934.

此の書はロンドン大學の宗教哲學の教授ウオターハウスの編輯にかゝり、東洋の諸大宗教を紹介せんとする企圖の下に出版されつゝあるものゝ一部である。出版の意圖を編輯者は述べて「神を求むることは凡ての國民の爲す所。神の名の如何に關せず、又その求め方の如何によらず、人は皆神を求むる。それとその間の同異を明かにする事は我々の側にあつて同情と尊敬を深むる助けと爲るに違ひない。此の叢書の目的とする所は批判的でもなく、又辯護的でもなく寧ろ記述的である。即ち諸宗教(基督教を除く)の開祖及びその經典に基礎を置いて世界の諸信仰體系の説明を試みんとするものである」と云ふ。此の點では宗教の比較研究に貢献せんと企てゝゐるのである。既にカトリックの試みとして五卷の同種ものが出てゐるが、本叢書には

印度教、儒教と道教、神道、回教、猶太教等の九卷が出る事になつてゐる。

上述の發刊の趣旨によつて知らるゝ如く此は研究的な著作ではなく佛教の智識の普及を志すものである。佛教と云つても廣汎なもので、如何なる種類の佛教を取扱ふかを著者は明言して「パーリ原典に見出され、又は之より明かに引出されたるもののみを以つて佛教と認定する」と云ふ。所謂「小乗佛教」綱要を直指して、大乘佛教を貶すことなく暫らく考慮外に措いてゐる。著者はデビッツ夫人に負ふ所が多いらしい。

内容は之を佛と法と僧の三部に大別し、第一は六章、第二は五章、第三は三章。卷末に文献を附して全頁百四十九。小本ではあるが、「佛教を知るには佛教的に考ふることを習はねばならぬ」と教へつゝ、シンバセティックに佛教思想を解説し、例證も親切に擧げ、妙味のある觀察も散見せしめてゐる。小規模の爲に著者の意見を多く見得ざる憾みはあるが、此の種の述作としては成功してゐると思ふ。(Y)

Freud, S. =

An Autobiographical Study. 1935.

本書は英譯で、數年前に米國で出たが、今度英國で新たに出版せられたもの、精神分析學の泰斗フロイドの自叙傳である。ゲーテの心を惹いた伊太利のチェリニーの自叙傳を見ると「少

し偉くなつたら自叙傳を書くべきものだ、但し四十過ぎてからのこと」とあつたのを覚えてゐる。西洋にはこんな風があるらしい。研究者にはいい、材料を興へることになる。フロイドは一八五六年生れだ。すると今年は八十一。此の傳記の中でこんな話が出てゐる。ウイリアム・セームスと共に「歩いてゐた時彼(セームス)は不意に立止つて持つてゐた荷物を私に渡して先に行くやうにと希うた、今自分には胸痛が起りつゝある、これがすんだらすぐ追ひつゝから、と云つた。彼はその病で一年後に死んだ。私は、彼が死に直面して平然としてゐたやうに、自分もさうありたいものだと常に願つてゐる」と。學説と生活が一致を缺いてゐる者には此の種の目覺めが時折あるらしい。マーチンの「宗教の神祕」に於ける、リナーベの近著「神か人か」に於ける、様子こそ違へ軌を一にした「目覺め」が不用意の内にのぞいてゐる。こんな處でほんとの宗教が動くのではないか。フロイドの宗教論もこの邊で出發したら、もつと深いものが出來はしないだらうか。何れにして *pansexualism* の非難を受けてゐた以前の事を思へば「自分の學説が斯くも世界的にならうとは思はなんだ」と云ふフロイドの言葉も、單に皮肉とばかりには聞えない。(Y)

惠信尼公文書

故山田文昭講師著

櫻部文鏡擬講編

惠信尼公文書が西本願寺寶庫に發見せられてから思へば十餘年になる。天空遙に懸れる恒星を暗夜臨み觀て瞬くが如し」と祖傳研究家をして歎ぜしめた宗祖聖人研究の困難の上に力強い望遠鏡の役割を果したものは實に本文書の出現であつた。覺師の殉欄、豪華な筆致で織りなされた衣が、さながら祖師の聖容を覆ふとも微塵も間然する處ない事を確實に保證したものが本文書であつた事は、研究家のどれ程大きい驚嘆であり、歡喜であつたか分らない。而して、消息文書の常なる讀み下しの難澁、難解なるは本文書も其の軌を一にするものであるが、之を克服して之が本文の讀み下しと、各通の研究、解説の附された鷲尾教導師の「惠信尼文書の研究」が早く刊行された事は斯學界に寔に不滅の功績を遺すものであつた。然し先驅開拓者の常に嘗むべき苦杯は本書も亦遁れ難く、可成りの誤讀と、夫に必然的な誤解とがある事は止むを得ない。随つて其の後訂正意見の發表や、本文書を援用せる諸研究、例へば「惠信尼文書に現はれし親鸞聖人」(梅原圃)「親鸞聖人と惠信尼の面影」(安井先生)「覺信尼公行實の研究」(藤原氏)「初期の本願寺」(上原氏)等の發表に依つて補訂される所多かつた。さりながら、かくの如き研究發表の性質として夫等は多く断片的で、夫々所引の個處に於いての意見の卓越はあつても、文書全般に互つて之を收載し嚴密なる校訂を施した權威ある底本たり得る如きものは未だ出づべくして出でなかつたもの、様である。尤も國文東方佛教叢書(第二輯第四卷消息部)は其の全體を收めては居るが、其の校訂は粗策で、鷲

尾師の研究に出づる所少く、且つ、其の性質上原本の體裁を損ふ所少しとせぬ爲め、據るべき良書とは云ひ難かつた。既に筆者の如きも曾て所要あつて、本文書を調べたる際仕方なく圖版(鷺尾師本所載)を中心に之を読み下し、前記諸研究を参照して、別にノートを用意した様な譯で、能ふ限り原本の面影を存し、而も既發表の凡ゆる研究の結果を十分考覈對照した、本文書の校訂本の如きは可成り其の出現が待望せられて居たと思はれる。されば本書の刊行は洵に機宜に適つたもので、寧ろ其の遲きを憾む程である。

本書、先づ初めに山田文昭師の御殿講(大正十三年六月)「惠信尼公文書に就いて」を掲げて居るが、簡單ながら本文書の性質内容等を紹介して、閲讀の豫備知識を與へる點に於て恰好のものであり、更に「覺え書」なる凡例に既發表の諸研究の主なるものを掲げてある事は研究者に大きな助言を與へて居る。

次に本文に入るに「第何通」と書信の番號が示された下に夫々執筆年月日と共に鷺尾師「惠信尼文書の研究」所收の圖版番號が記入されて居り、更に各通の主要記事を標擧し、尙參考文獻の書名章節を(例へば第三通目に口傳鈔中卷第十一節を指摘せる如き)舉げて讀者に便せる如きは編者の尋常ならぬ用意の周到さが偲ばれてゆかしい。大體本書は故山田講師の遺稿と云はれるものであるが、其の「覺え書」からも窺はれる如く、遺稿を遺稿として無責任に其の儘上梓されたものでなく、編者の意圖が色濃く滲み出て居る。頭註の如き其の尤なるもので、難讀の個

處、異説ある點、疑問の節、等之を指摘して、夫々簡單ながら考察が加へられて居る事は洵に前記の要望を充すもので、「深く推諒せられたものではなかつたらしい」(本書覺え書)遺稿の上梓には極めて重要な役割を果すものと推はれる。尤も第三通追申文の末尾の「美ハシクハシハ候ハシ」(上原氏同説)や第五通「コセタスカランスルエンニアイマイラセン」に於ける前者の「仕得候はじ」後者の「縁に遭ひ云々」の讀みの如き、山田師の創見にかゝる點も少しとせぬが、尙頭註に於ける意見の探る可きもの多きは本書の價値を高からしめて居る。

二、三例を舉げるならば、第一通末に鷺尾師、山田師共に「オノミ」とせるを「オノコ、」(男子)、「オン」とせるを「下人」と直せるは既に藤原氏も指定せる如く、之を正とするし、第七通「イマハトゴロトモハナレ候テオントモミナニケウセ候ヌ」「ハタトクモノヨソナル」(山田、鷺尾兩師)とある「オントモ」「ハタトク」を夫々「下人」「ぼろん」と讀めるも共に正しい。第九通追申文中の「上レンホウノ事モトハセラレテ」を「思いてられて」と讀めるも筆者の同意を表し度い所であり、第十通「タフシマテハ候ハス」タフシマテモ云々の「タフシ」に「當時」の文字を充てられて居る事(安井先生同説)も、藤原氏は「冬至」の文字を充て、いたく之を主張して居られるが、前説が穩當と推はれ、此文字は同様に第八通の「タフシツクルト申候へハ」及び第九通「ソレモタフシ」大ニテに充て、夫々「當時造ると申候へば」「それも當時大事にて」と讀んで然るべしと考へられる。かうした

例を擧げれば相當多數に上り、其の悉くを珠玉と讃する譯には行かぬが、大過なき事は編者の功として認められねばならない。唯第九通「入道メニハチアルモノ、ナカノ云々」に於ける「チ」が「血」なる事明なるに漢字の充當なき爲め、解讀に困難を感じしめたり、第十通「チ、ハ御ケン人ニテウマノセウト申候云々」に於ける「御ケン人」は「御家人」で下の「人」の字は抹消せられて居る文字なる事安井先生の指摘されたる如きを看過した杯、さうした瑕瑾の見出せぬではなく、殊に第三通別筆端書中の「コノ御ウハカキハコ上ノ御テ也」とある覺師の筆に「コ上」と濁點を附せる如き、本文ではないが重大なる過誤と見做さるべきである。其の徳治二年丁未四月十六日の日附は覺惠の歿時徳治二年四月十二日（存覺一期記徳治二年條）より遅る、事四日で「コ上」が「故上」なるべき事勿論であり、更に覺惠歿後僅々五日目に態々此の端書がなされた事は、本文書の原始教團に於ける地位が如何に大なりしかを暗示するものとして、此の端書の意義を惟ふにかゝるミスは決して看過さるべきでないと思ふ。

次に本書印刷の體裁を考へるに讀み易いと云ふ事に主眼を置いたらしい本書として「行段の體裁は原本によらず、適當に追ひ込み、或は切り改め」「追申、端書等はすべて本文の後に廻した事は止むを得ぬ仕儀であらうが、如何なものであらうか。第一通、第二通の下人讓狀に於て下人の名の一つ毎に行段を改めて番號を附せる如き、其の意圖の最も鮮明な現れで好意の持てる意遣ひではある。然し行段の改めや句讀濁點の附加

は兎も角として、追申、端書等の凡てが後に廻された事は或は原文の體裁に可成り遠ざかつた印象を興へられる様である。又漢字充當についても、本書は漢字に重點を置いて、充てられた漢字に原文の假名を振つて、通常のテキストの逆を採つて居る。此等の點については立場々々で異論のある事であつて、原文の忠實なる再生と云ふ點では期待の外れる事もないではないが、然し本文書の如き單に一部の専門研究家のみの對象としてではなく廣く一般に親しまれて、精神的資糧ともなるべき性質のものとしては讀み易いと云ふ事も考慮に入れらるべき重要な條件である事は多言を要せぬ所、隨つて本書はさうした要求を充すに於ては申し分なき役割を果して居ると云ふべきであらう。唯、普及と云ふ點のみから考へれば、特殊語句や難語に對する註釋に稍不足を感じる憾みはあるが。

かく見來る時、本書は、其の印行體裁に稍學術的嚴密性を缺く嫌ひのないでもないが、前陳の如く内容は校訂、補註其の宜しきを得て、鷲尾師圖版と共に研究者の机上に必ず備へらるべき良書なるは勿論、廣く一般に一讀せらるべき好書であらう。敢て紹介の筆を執つた所以である。（昭和十年十一月破塵閣書房發行、和裝半紙判三十一番、定價〇・八〇）（釜田）